

チモシーの刈り取り適期(試験結果)

(1984年 新得畜試)

刈り取り適期 出穂始期~

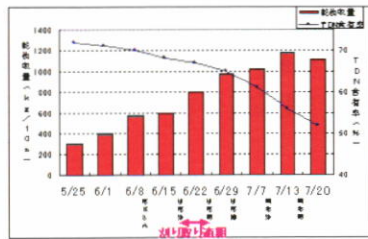


図4 チモシーの刈り取り適期

(4) チモシーの刈り取り適期

牧草の刈り取り適期は、「収量か」、「栄養価か」といった生産者が求めるものによって異なります。図4では、この両者を比較的満足する時期を適期としました。チモシー基幹草地の1番草の刈り取り適期は、乾物収量およびTDN含有量、作業期間を考慮して、出穂始め期～出穂期の間刈り取りましょう。

マメ科混播は大切



図5 マメ科(クローバ)混播は大切

(5) マメ科混播草地は大切

マメ科混播草地(図5)とは、イネ科単播草地より嗜好性、栄養価、収量、施肥の経済性などにおいて優れた特性を持った草地です。

マメ科牧草には、アカクローバ、シロクローバ、アルファルファなどがあります。なかでも、アカクローバとシロクローバが栽培のし易さとコスト面、定着の良さから主流となっています。

収量の増加

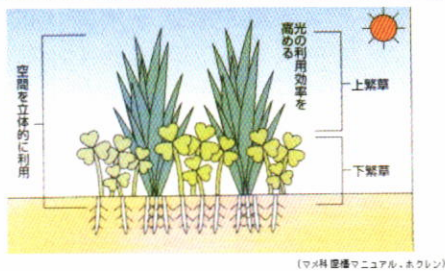


図6 収量の増加

(6) 混播による収量の増加

図6はマメ科混播草地の収量についてその優れた特性を説明しています。

①草地生産性からみて、直立するイネ科牧草と水平葉をもつマメ科牧草が組合わさると、太陽エネルギーを効率よく利用することができ増収につながります。

②アカクローバなどの深根性の牧草を混播すると土壤中の養水分を効率よく吸収できます。

肥料費の低減

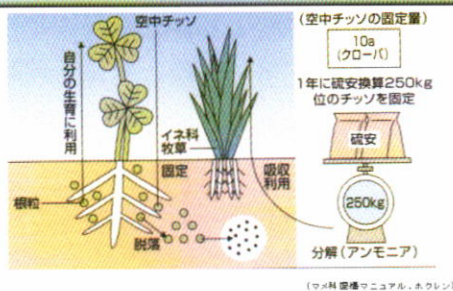


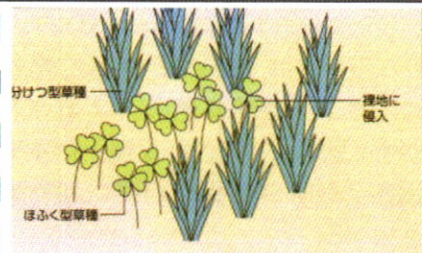
図7 肥料費の低減

(7) 混播による肥料費の低減

①マメ科牧草は根粒菌の働きにより、空中窒素を固定して自分の生育に利用可能な状態にします(図7)。

②イネ科牧草もこの窒素を利用できるので、マメ科を混播することにより、増収と肥料費の低減効果があります。

裸地の防止



(マメ科混播マニュアル、ありん)

図8 裸地の防止

(8) 混播による裸地の防止

- ① マメ科牧草のうち特に、ほふく型の生育特性を持つシロクローバは裸地防止に効果を発揮します(図8)。
- ② この特性により雑草の侵入が防がれ、結果的に牧草収量を維持、増収する効果があります。

品質・栄養価の向上



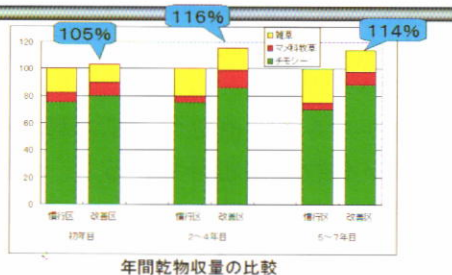
(マメ科混播マニュアル、ありん)

図9 品質・栄養価の向上

(9) 混播による品質・栄養価の向上

- ① 栄養面からみると、マメ科牧草は乾物中の粗蛋白含有量が高くミネラル分を多く含みます(図9)。
- ② イネ科牧草にマメ科牧草を混播すると炭水化物や繊維の多いイネ科と、蛋白やミネラルに富むマメ科の組み合わせにより、栄養バランスが良好になります。

適正施肥は良い草地进行維持する！



(原稿典式、1996年)

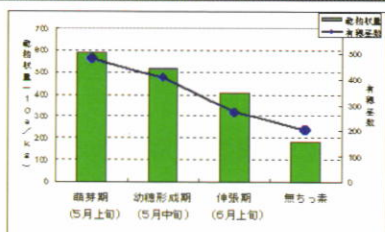
図10 適正施肥は良い草地进行維持する

(10) 混播草地の施肥管理

混播草地の施肥は、マメ科率、pHやリン酸やカリの土壌診断値に応じ、施用量を決定します。

図10はイネ科とマメ科の混播草地に「根室の慣行的施肥を行った区」と「マメ科率や土壌診断値に基づいて適正に施肥した改善区」を比較したものです。適正施肥に改善した区では更新後年数を経ても慣行区を上回っています。

施肥が遅れると収量がとれない！



(松中・小崎、1985)

図11 施肥が遅れると収量がとれない

(11) 早春の施肥適期は牧草萌芽期

図11は、早春の施肥時期が1番草収量、有穂茎数に及ぼす影響を調査したものです。

早春の施肥時期が萌芽期より遅れた場合には、有穂茎数が十分に確保できないため、収量が伸びません。